

---

# 事件発生！？

マイクロフト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

事件発生！？

### 【Nコード】

N2497M

### 【作者名】

マイクロフト

### 【あらすじ】

いろんな意味で事件が発生していきます。一応高佐のつもりですが、犯罪が起こった家族と同じ名字だった佐藤刑事、担当では無いながらも、捜査に協力していくが・・・\*初投稿作品です。

## 第一話 殺人事件発生！（前書き）

初投稿なので、かなり読みづらいですがよろしくお願いします。

## 第一話 殺人事件発生！

高「被害者は佐藤孝義さん46歳、死亡推定時刻は午前1時から2時、殺害方法は刺殺と思われます。鑑識さんの見解では、刃渡り15センチから20センチほどの刃物が凶器に使われた、ということです。」

東京都浜張町で殺人事件が発生した。第一発見者である、被害者の娘の佐藤宏美18歳からの通報により、高木、目暮、が駆けつけたのである。

目「そうか・・・強盗殺人か？」

高「いえ、金目の物を盗られた痕跡は全くありません。鍵を壊されたような形跡ありません。戸締りはしっかりしてあったと、被害者の奥さんが証言しています。」

目「ホー、これは家族内での犯行と見て良さそうだな。」

高「ええ、そう思われます。」

佐藤家は、被害者の妻の佐藤君江45歳と息子の孝文16歳と孝弘15歳の5人家族だ。

そして、全員が容疑者である。



## 第二話 疑い

〔警視庁〕

高木は一時的に捜査を終え、佐藤に佐藤一家の事件の概要を話した。

佐「へー、私と同じ名字、佐藤一家で殺人ね……。よくある話だけど、毎度毎度なんかいやなのよね。しかも、今回の事件で<sup>ヤブ</sup>殺されたのって第一発見者のお父さんでしょ？」

高「ハハハ……。まあ、“佐藤”なんて名字よくある名前ですからね。何せ、日本一ですよ。」

笑いながら言った高木を、佐藤は軽く睨み、自嘲気味に言った。

佐「全く……。笑い事じゃないわよ。……。人事なんだから。」

高「す、すいません。……。でも、佐藤さんももうすぐ人事になるかもしれないですよ？」

佐藤は、ポカンとした顔で言った。

佐「うん？？どういうこと？」

高「いや、なんでもないです……。」

もうすぐ、名字が高木になるかもしれないからとは、言えない高木なのだった。

佐「で、疑われてるのって、その被害者の奥さんなんだって？」

高「そうなんです。家の戸締りはしてあったと、証言していたのですが、隣の家に住んでいる木村さんという方のホームビデオに、犯

行推定時刻の間どころか、その日の一晚中、奥さんの部屋にある勝手口が大きく開け放してあったのが、映っているんですよ！」

佐「そりゃまた、どうしてホームビデオにそんなものが？」

高「なんでも、<sup>ワールドカップ</sup>W杯で、<sup>トーナメント</sup>日本代表が決勝Tに進出したお祝いに庭でホームパーティーをその日、一晚中していたそうなんです。」

佐「なるほど、その様子をホームビデオとして、ずっと撮っていたのね。それが、庭だったもんだから、隣の家がちらちら映っていた……。それはまた、岡田監督に感謝したい話だね。」

高「それも、そうですね。これで、終わってくれることに期待しましょう。」

二時間後、その期待は裏切られることになる。

### 第三話 裏切られた期待（前書き）

なんだか、一話一話が短くなってしまっていますね。  
どうか、ご勘弁ください。



### 第三話 裏切られた期待

（佐藤宅）

目「・・・くそう、まさか、一番の容疑者である君江さんが殺されてしまうとはな・・・。」

高「ええ、しかも、家族の誰かが事件に関与しているというのは、お子さんたちも気に病む話です。」

目「全くだ！。まあ、こんなことばかり言っていては、仕事にならないがな。」

佐藤孝義氏が殺された翌日の午前1時から2時ごろ、同じ手口で妻である佐藤君江が殺されたのである。

高「しかし・・・、奥さんが勝手口をあけっぱなしにしていたのはなぜなのでしょう？というより、あけっぱなしだったというのは、外部犯がいたということなのでしょうか？」

目「まあ、その可能性が高いと思って良いだろう。だが、さっきも君が言ったように外部犯だけの犯行ではないな。断定はできないが奥さんはたぶんクロだろう。あの証言は明らかに嘘だからな。」

高「今回の事件でも戸締りはしてあったとの三人全員の証言があります。しかし、あんなことがあったばかりですから、三人とも昨日は一（孝義氏が殺された日）の夜は、近くの親戚の家で過ごしていたみたいです。そして、教科書を取りに来た孝弘くんが遺体を発見した。」

二日続けての事件、しかも家族内だったということもあり、三人と

も本格的な事情聴取は明日に延期になっていたものの、親戚の中年女性がいわゆる“野次馬おばさん”で、べらべらとその時の三人の様子を話していたのである。

〈警視庁〉

高木は、君江氏の周辺をあらい、外部犯・共犯の可能性のある人物を探し出していた。そして、資料化するためにオフィスワードヘカチャカチャと、写していた。

- - - - -すると。

佐「わっ！！！」佐藤は思い切りよく高木の肩をたたいた。

高「うわあああっつ」

高木は素っ頓狂な声をあげた。佐藤は、くすくすと笑いだした。

佐「驚いた？」

高「驚きましたよ！・・・ってか、何するんですか？今、大切な資料を作ってるんですから、打ち間違えたりしたらどうしてくれるんですか？」

高木は、あせったように聞いた。すると、佐藤はわざとらしくしか

めっ面をして答えた。

佐「だって、何回も高木君って呼んでるのに、ちっとも気付かないんだもん。」

高「ああ、そうだったんですか。・・・それは、失礼しました。」

佐「大切な資料って、あの“佐藤家”事件の？」

高「ええ。そうなんです。」

高木はこれまでの事件の経過と、共犯探しの成果を簡単に話した。

佐「ええっ、奥さん殺されちゃったの？」

高「はい、・・・全く、面目ない話ですよ。容疑者をみすみす殺されるなんて。」

高木は、肩を落とし、続けた。

高「でも、これでわかったことも、あるんです。外部の共犯者がいるというのは、奥さんの証言が嘘だった時点でほぼわかっていたのですが。」

高木は少々疲れの見える目を押さえた。

佐「が？」

高「家族の中に、・・・というより、あの三姉弟の中にも共犯者がいるってことです。まあ、親戚や本人たちなどからの捜査をしたところでの、僕の見解で、ですがね。」

## 第四話 共同捜査開始！？

〔浜張町 佐藤家周辺〕

高「そつちはどうでしたか？佐藤さん？」

佐「いえ、とくに収穫はないわ。高木君の方は？」

高「こつちもダメですね。全く、、親戚の中年婦人みたいな人がたくさんいるとよかったんですけどね。まあ、最近は近所付き合いも薄くなってきているって言いますからね。しかも、こんな閑静な住宅街となると・・・。」

佐「収穫がなくても仕方ないわね。・・・今度は、友人関係まで範囲を広げましょう。」

佐藤と高木は、佐藤家のある住宅街に家族の中で何か問題があったなどの情報があるか捜査しに来たのであった。

高「しかし、すいませんね、佐藤さんまで付き合わせちゃって。」

佐「気にしないで、勝手に付いてきているだけだから。・・・なんか高木君、妙に気合入ってるし。」

高「そうですか？」

佐「そうよ！だって、高木君最近全然寝てないみたいだし。ここ三日間くらい徹夜でしょう？張り込みでもないのに。」

高木は狼狽した。

高「なんで知ってるんですか？」

佐「千葉君に聞いたのよ。すごく心配してたわよ？たまには休みなさいねっ。」

高「は、はい・・・」

佐藤は、少し眉をひそめた。

佐「でもなんで、そんなに気合入れてるの？まあ、高木君は基本、一生懸命やってるけどさ、今回はかなり力入ってるよね？・・・もしかして、前に私が言った事を気にしてるの？」

凶星だった。

高「ええ・・・ま、まあ。できるだけ早く犯人が捕ったほうが気にし過ぎなくて良いかな、と。」

佐「気にし過ぎなのは高木君でしょう？まーったく、これで貴方が倒れちゃったりしたら、そっちの方が気にするわよ。」

高「ハハハ・・・すいません。」

佐藤は、口調を尖らせながらも、まんざらでもない顔をしていた、高木は安堵した。

#### 第四話 共同捜査開始！？（後書き）

これから、テスト週間に入るので、更新できないかもしれませんが、終わったらしていきたいと思います。

## 第五話 共同捜査開始！？（前書き）

テスト、終わりました！

これから更新していきたいと思います。

## 第五話 共同捜査開始！？

（警視庁）

佐「高木君！当たったわよ！・・・どうも、娘さんの方に問題があったみたいね。」

高「え？ほんとですか？少し見せてください。」

高木は佐藤が差し出した資料を引っこ抜くように取り見た。

佐「宏美さんの塾の友達である、石川さんと話ができたの。どうも、婚約者の事で両親ともめてたみたいなのよ。」

高「そうなんですか・・・。」

そう言いながら、高木は資料をめくった。

佐「あまり詳しい事はわからないみたいだったけど、かなり悩んでたみたいね。宏美さん。」

高「・・・宏美さんですかね、共犯は。」

佐「うーん。まあ、証拠はないけど・・・たぶんそうね。弟さん達には、本当になーんにも無さそうだから。しらみつぶしに探してたんだから、まず、間違いないわよね。それは、高木君にもわかるでしょう？」

高木は眉をひそめて言った。

高「そうですね・・・。」

佐藤は高木の態度に怪訝な顔をした。



佐「どうしたの？なんでそんなに、悲しそうなの？」

高「ええっ？」

佐「もしかして、宏美さんが可愛いから・・・とかじゃ無いでしょうね？」

高「いやいや、そういうわけじゃあ・・・。」

佐「ホントにー？」

佐藤は高木を軽く睨んだ。

高「本当ですよ！・・・まあ、可愛いっちゃ、可愛いですが・・・。」

佐「・・・ふーん。」

高「なっ、何なんですか！全然信用していないその顔は！」

佐「知らないっ。」

そう言うと、佐藤はくるりと踵を返してスタスタと歩いて行ってしまった。

高「さ、佐藤さん・・・。」

高木はうなだれながらも、外部犯の捜査に取りかかった。君江氏の周辺だけに的を絞って洗いなおすのだ。

3日間、君江氏の周辺を歩き回って捜査し、半日、デスクに張り付いてようやく、2人浮かび上がった。

一人目は、君江氏が通っていたお茶教室の先生である。名前は、小杉重也（43）。

仲が良かったらしく、不倫関係があったのではないかとにらんだのだが、特にそういう動きも無いらしい。

ちなみに小杉氏は独身である。

二人目は、孝義氏の姪である。名前は、佐藤真紀子（28）。孝義氏と兄である孝一氏は仲が悪かったらしく、その影響で孝一氏の娘である真紀子氏もあまり良い印象は無かったようだ。しかし、その割に君江氏と真紀子氏は仲が良く、ときどき真紀子氏の母、孝一氏の妻である、佐藤真知子氏を交えて、食事などに行っていたという。

君江氏が孝義氏に何らかの負い目があり、真紀子氏と共謀したのではないかと考えたのだ。

高木は、調べた内容を資料化し、一息つこうとソファに長くなっていた。

そんな時、科学捜査研究所<sup>SRI</sup>から、情報が送られてきた。

凶器らしきナイフに、孝義氏の血痕と、君江氏の皮膚片が発見された。指紋は拭き取られていたものの、ルミノール反応と、ナイフの隙間に挟まった皮膚片は拭き取れなかったようだ。

これで、君江氏の犯行が証明されたのだった。

## 第六話 見えない外部犯

〔警視庁〕

高木は、科学捜査研究所SRIからの資料を整理していた。すると、興味深い情報が見つかった。

なんと、開いていた勝手口の扉の付近から家族以外の人物が出入りした形跡が全くないとの事だった。

家族の中では、勝手口を使う事はほとんどなく、いくつか形跡があっただけで、外部犯が勝手口を使って出入りしたのなら、何らかの形跡が残っているはずである。

そのほかの資料では、宏美氏が君江氏を殺した凶器であろうナイフが見つかった、とのことだった。

確定ではないが、宏美氏が共犯であることは、まず間違いないだろう。

高木はため息をはきつつ、外部犯の目撃証言の捜査へ出た。

靴底が5mm位すり減ったのではないかというほど高木は歩いた。しかし、収穫はなかった。

高「（全く……。どーなってんだよ。外部犯が全然つかめない。）

ー

高木が警視庁に戻ったところには、真上にあった太陽がもう、西の空に沈んでいた。

## 第六話 見えない外部犯（後書き）

めちゃくちゃ短いですけど、熱があるので、勘弁して下さい。  
これからもよろしくお願いします。

## 第七話 先入観

（警視庁）

高木は、完全に暗礁に乗り上げていた。  
全く外部犯を絞る手立てが見つからないのである。

高「どうしたもんかなあ」

高木は他の事件の資料を仕上げるため、カチャカチャとキーボードを打ち出した。  
ブラインドタッチには慣れていたが、悩んだ頭は誤字ばかり指先に打たせる。

高木は資料の処理を諦め、ドカツと背もたれによりかかった。

- - - そもそも、外部犯なんていないんじゃないのか？

そんな考えが、ふと高木の頭に浮かんだ。

- - - ともと、外部犯はあの木村という一家のホームビデオに写っていた開いた勝手口を証拠に思い込んでいただけなのかもしれない。

- - - 木村家はグルだったのか？

- - - いや、グルになって外部犯の存在をほのめかしたところで、木村家に利益はない。それどころか、疑いが向くだけだ。そんなことをする義理はないし、そんなことをしたところで、

君江氏や宏美氏の疑いが晴れるわけではない。

「……だとしたら、君江氏がわざと勝手口を開けたとしか考えられない。なぜだ？なぜそんなことをする必要があったんだ？そんなことをしたところで、自分に疑いがかかるだけなのに……。」

「……もしや、君江氏は……。」

高木は、頭をたたかれたような気がした。

初めは、事件の真相が見えたからであろうと、じんと響く痛みに感動していたが、一拍置いて本当にたたかれたのだと気付いた。

高木は振り返った。

すると、しかめ面の佐藤がそこに立っていた。

佐「高木くん？、気づくの遅すぎー。」

高「あ、……す、すいません。ちよつと考え事してたもんで。」

佐「へえー。宏美さんの事でも考えてたのかしら？」

佐藤はいたずらっぽい顔をして聞いた。

高木の答えは意外なものだった。

高「ええ、そうですよ。ここ一週間ぐらいずっと。」

佐「え？」

佐藤は目に見えて狼狽している。

高木はそんな佐藤の様子を見て、クスリと笑った。

高「・・・、わかつたんですよ。宏美さんの事件の真相が。おぼろげにですがね。」

高木は何か、吹っ切れた様子で佐藤の方を見やった。

佐「“宏美さん”の事件ね。」

高「そうですよ。これは、宏美さん、、いえ、宏美氏の事件ですよ。」

佐「・・・どういうこと？」

佐藤はからかうのも忘れて聞いた。

高木は話し出した。

## 第八話 真相

（警視庁）

高「つまり、孝義さんを殺したのも、君江さんを殺したのも、宏美氏だったんです。」

佐「・・・どうしてそう言い切れるわけ？ 実際、孝義さん殺しに使われたナイフに君江さんの皮膚片が残っていたんでしょう？」

高「あのくらいなら、自分でワザと残すくらいの事は出来ます。君江さんは宏美氏を庇おうとして自分に容疑がかかるようにしたんでしょう。自分が宏美氏に殺されてしまうとも知らずに。」

佐「でも、外部犯は？ 君江さんの部屋の勝手口が・・・、もしかして、外部犯なんか存在しなかったんじゃないの？」

高「ええ、おそらく。警察に自分を疑わせるきっかけを作るウソをつくために、それも、わざと開けたのでしょう。そうじゃなきゃ、この状況で犯行が行われるわけがないんです。ホームパーティーをしているさなか、人に見られるリスクを負ってまで犯行を行うような外部犯なんかいません。見つかったところで、自分が疑われるだけですし、君江さんのように庇うべき人は全く捜査上に浮かんではいません。」

佐「捜査上に浮かんでこないような人物をわざわざ庇わないということね。」

高「もう一度、その線で調べてみましょう。宏美さんにも会って取



り調べてみましょう。君江さん殺しだけではなく、孝義さん殺しの方でも、問いただしてみましよう。」

〈取調室の前〉

高「取り調べはもう終わりましたよ。弁解録取に入りますけど多分すぐ終わるでしょう。千葉に、任せておきます。」

佐「そう。で？・・・どうだったの？」

高「あっさり容疑を認めました。というより、取調室に入れた途端、べらべらしゃべりだしましたよ。全く・・・僕の苦勞は何のためだったんでしょう？時間を返してほしいですよ。」

佐「前に言っていた宏美氏の婚約者ってね、ムシヨ刑務所に入ってる人だそうね。」

高「そういうことか・・・。」

もともと、刑務所に入るためという意味もあつたのだろう。

佐「宏美氏には精神的にも問題があつたみたいだわ。だから、ここまで取り調べが伸びたのよ。それが、裏目に出たってわけ。」

高「そうですね。」

高木はどっと疲れが出た。

佐「でもさ、なんでそんなに宏美氏にこだわってたの？そうじゃない  
きゃ、ここまで、わからないでしょう。捜査方針がまるで違うのに。」

高「・・・怒らないなら、言ってもいいですけど。」

高木は、投げやりな感じに言った

佐「怒らないから、言ってみてよ。」

千葉の弁解録取が終わったようだった。

## 第九話 迷宮入り

高「顔と声だけですが、・・・似ているんですよ。佐藤さんと宏美さんが。」

佐「・・・。」

佐藤は無言で出て行ってしまった。

高「・・・佐藤さん？」

高木は立ち尽くした。

高木は何となく居づらくなって  
缶コーヒーでも買おうと自動販売機に近づいた。

すると、ガラス越しに佐藤が居た。

宮本由美婦警を相手にして、佐藤は笑っていた。

声をかけようにも、ガラス越しでそういうわけにもいかない。

高木は、どうしたらいいか分らぬまま  
佐藤に気づかれないようにその場を立ち去るしかなかった。

## 第九話 迷宮入り（後書き）

高木刑事は後で由美さんにことごとくからかわれたとき（笑）

終わり方が微妙かもしれませんが・・・。

事件物というよりも、高木刑事の骨折り損捜査の話みたいですが。

高木刑事っぽいといえば、それっぽいですかね？

駄文ですが、読んでくださりありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2497m/>

---

事件発生！？

2010年10月10日07時46分発行